



今回は 歴史探究フィールドワーク(関市・山県市) の報告です。

◇ 関市観光協会・関市企画広報課と合同で、フィールドワークを行いました！

日時: 令和元年12月25日(水)
場所: 関市広見・洞戸・武芸川地区、山県市中洞地区
参加: 関高等学校地域研究部・放送部 関市観光協会 関市企画広報課

◇ 明智伝説の謎解きの開始

地域研究部では、関市の依頼を受け「明智光秀・明智一族と関市との関わり」についての調査を行っています。令和2年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる！」によるブーム到来にあやかっの観光資源開発が発端ですが、調査を開始すると意外な史料が次々と浮かび上がってきました。

<その1 洞戸の光秀伝説>

犬山藩士間宮宗好がまとめた『美濃雑事記』(1816)には、洞戸に明智光秀が住んでいたとの伝承が記録されている。伝承の内容は峠をはさんだ山県市中洞に残る伝承とほぼ同じである。中洞にも「峠を越えた洞戸の菅谷で光秀が薪を拾った」との伝承がある。中洞と洞戸は隣接しておりともに旧武儀郡に属する。同一の伝承が広がっていたと考えてよい。

<その2 家系図伝承と神野・小瀬>

「明智氏一族宮城家相伝系図書」(江戸期の家系図)には、系図上、光秀の遠祖にあたる人物(4代前の頼定、7代前の頼秋)が、現在の関市神野・小瀬を統治していたとの記載がある。

<その3 土岐文書と広見>

徳川幕府の譜代大名であった土岐家に伝わる中世文書(土岐文書)には、南北朝期から室町初期にかけて、現在の関市広見とその周辺が、明智氏の所領であったことが記されている。歴代将軍からの所領安堵状であり、明智氏が幕府と近い間柄であったことがわかる。

その1・その2は、伝承や後世の家系図に基づくものであり、資料としての信憑性は希薄ですが、その3は当時の地方武士と室町幕府との関係を伝える良好な史料であり、明智氏が関市の一部を統治していたことは間違いありません。史実と伝承との間に何らかの関わりがあるのか、あるいはまったくないのか。地域研究部では現在でも調査を継続しています。

関市広見の天神神社



◇ フィールドワークのようす

文書や伝承の舞台に、当時を伝える痕跡が残っていないか。地域研究部で調べたところ、明智氏と直接結びつくような史跡は見当たりませんでした。

ただ、神野とその周辺(富野地区)には、鎌倉末期にさかのぼると考えられる臨濟宗寺院

や古代・中世の仏像、古社、荘園の所在が知れる古記録が残されています（「SGH情報」第10号で報告）。

今回、フィールドワークを行った広見地区にも、実際出かけてみると、15世紀にさかのぼる古社（天神神社）や鎌倉末期に建立されたという寺院（松見寺）がありました。臨済宗相国寺派の松見寺は、伝承によれば、足利尊氏の祖母にあたる人物が建立したと言い、現在は無住の寺となっていますが、本堂には優美な本尊や三十三観音が安置されていました。室町時代の「美濃神名帳」に名を残す天神神社も、まったく新しい社殿ではありましたが、付近一帯を見渡すことのできる小高い位置に所在しています。ともに、このあたりが明智領であった時代からの寺社です。

一方、洞戸の菅谷にも伝説の舞台となった保福寺（臨済宗妙心寺派）があり、寺伝によれば、創建は室町初期にさかのぼるとのことでした。伝説の舞台となった地には、中世にさかのぼる古い寺社が必ずと言ってよいほど残されています。

最後に、山梨市中洞の桔梗塚（伝光秀墓）と白山神社を訪れました。大河ドラマ放映が近いということで、駐車場が整備されのぼり旗が飾られていました。

現状では、伝承と史実の関係の究明よりも、大河ブームに便乗した観光開発が優先されているようです。



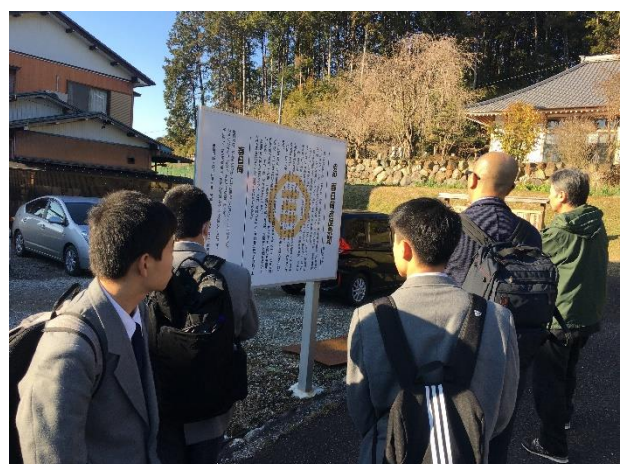
松見寺本堂のようす

◇ まちづくりは、まず地域の歴史を知ることから

関市観光協会の観光アドバイザー柳田佳彦さん、関市企画広報課の山田和義さんから、フィールドワークの最中、様々なお話をうかがいました。おふたりからは、関高地域研究部の「探索能力」の高さを評価していただきました。私たちは、史実と伝説の境目をはっきりさせることを基本に研究を進めています。

今回のフィールドワークでも、明智家に直接つながる手がかりは見つかりませんでした。伝説の舞台にふさわしい数々の文化財に出会うことはできました。こうした地域の素晴らしい歴史的遺産を、地域の方々にもっと知っていただくことが大切だと感じます。

今回のフィールドワークの成果は、「関市広報」誌上で発表されます。さらに、柳田さんや山田さんのアドバイスを受けながら、歴史探究の成果を動画などでわかりやすくする工夫を、放送部員と地域研究部員の合同作業で進めていく予定です。



関市武芸川の春日局屋敷伝承地